

# 雨引山樂法寺所蔵《十二天像》について

渡邊 晃

はじめに

本稿は雨引山樂法寺所蔵の十二天像（以下、樂法寺本）に関する調査報告書である（種図1-12）。調査資料の現状について報告するとともに、その図様の特色について言及する。また、他の十二天像との比較を通じ、その位置付けについて若干の考察を試みるものである。

## 一 調査資料の現状

作品名 《十二天像》

作者 不明

制作年代 江戸時代

所有者 宗教法人 雨引山樂法寺

材質技法 軸装 紙本着色

数量 一二幅

本資料は木製の外箱に収められている。外箱の寸法は以下の通りである。

縦 六一・〇 cm  
横 一九・八 cm  
高さ 一八・二 cm

外箱の蓋の内側に裏書がある（種図25）。

（上段）高祖四圍八十八ヶ所旧跡之内

三十八ヶ所土州流陀（テシヨリ）山金剛福寺

大師真作石板十二天尊圖全

具十二幅

世々石摺之

版ト云也

右石版寛永年中令禁板

世間不出尊圖靈寶可秘

（中段）柳十二尊天者密教護持之大將

佛法擁護之天王也因茲為當院

人法不退奉養納者也 敬白

が省享保一四巳酉載（歳カ）八月廿一日

（下段）當寺一八世 法印吽教（花押）

各作品には軸裏には墨書が見られる。内容は以下の通りである。題名の横には

十二天を表す梵字が書き込まれており、墨書きの内容の下に示した。

帝釈天	安政三辰仲夏修覆之	雨引山什物	
火天	安政三辰仲夏修覆之	雨引山什物	
炎魔天	安政三辰仲夏修覆之	雨引山什物	
羅刹天	安政三丙辰仲夏修覆之	雨引山什物	
水天	安政三辰仲夏修覆之	雨引山什物	
風天	安政三辰仲夏修覆之	雨引山什物	
多門天	安政三辰仲夏修覆之	雨引山什物	
伊舍那天	安政三辰仲夏修覆之	雨引山什物	
梵天	安政三辰仲夏修覆之	雨引山什物	
地天	安政三辰仲夏修覆之	雨引山什物	
日天	安政三辰仲夏修覆之	雨引山什物	
月天	安政三辰仲夏修覆之	雨引山什物	

各尊像の法量は以下のとおりである。このうち炎魔天、多門天は一般的な表記と異なるため、本稿では以降通常の表記と思われる焰魔天、毘沙門天にそれぞれ表記を統一した。

帝釈天	縦一六二・一 cm	横四四・七 cm
火天	縦一五九・九 cm	横四五・五 cm
焰魔天	縦一五八・一 cm	横四五・一 cm
羅刹天	縦一六〇・九 cm	横四四・八 cm
水天	縦一六〇・五 cm	横四五・〇 cm
風天	縦一六〇・四 cm	横四九 cm
毘沙門天	縦一六三 cm	横四四・八 cm

伊舍那天	縦一六〇・〇 cm	横四五・二 cm
梵天	縦一五七・四 cm	横四五・〇 cm
地天	縦一六一・三 cm	横四五・一 cm
日天	縦一五八・〇 cm	横四五・二 cm
月天	縦一六三・〇 cm	横四四・八 cm

## 一一 表具と画面の状況

本図は木製の外箱に収められている。外箱はかなり傷みが見られ、二箇所別材を用いた補修の跡がある。このうち一箇所は木材の接合部が一部破損し、ぐらつきが見られた<sup>補図26</sup>。蓋には紙片が貼り付けられ、「十二天」と記載されている<sup>補図26</sup>。蓋の側面には二箇所につすりと墨で文字の書かれた跡が認められるが、内容の判読は難しい。また、箱の側面にも、縦方向に墨書で「十二天」と書かれるほか、数箇所に墨書で薄く文字の記載が見られる。これらも内容については不明である。

本図は紙本着色で描かれている。全体的に表装にはかなりの傷みが見られ、各所に剥落や巻皺、染みなどが認められる。また、風帯は描き表装の体裁をとる。裏側から透かして見ると全ての作例に例外なく多くのかすがいが見られ、本図が一度修復を経ていることがわかる。各作例の軸裏には安政三年修復の記述が見られるが、修復の跡はこの記述を裏付けるものと言える。表具全体に共通する特徴として、画面下部の軸付近に見られる茶褐色の汚れが挙げられる。この汚れは、程度の差はあるが殆どの作例において認められた。軸と紙を接合する糊のようなものが、軸から紙へと染み出し、さらに軸を巻いた際にその汚れが向かい合う紙にも付着したものであるうか。また、表具の「中廻し」と「天」や「地」部分との境界線で表面の紙が剥がれ、上下にめくれている状態が多く、作例で認められた。以下に、尊像ごとの表装の状態について述べる。各尊像の画面状況について

は、挿図13—24を参照されたい。

#### 帝釈天

本図は本紙上部に大きな剥落が見え、肌裏が露見している。本紙右中央の右端、本紙下部の中央にも同様の剥落がある。巻皺が多く見られ、特に尊像の相貌部分において、左右に伸びる山折の皺が認められる。画面上部、表装の「天」部分と「中廻し」部分の境界において表装がはがれ、上下にめくれており、画面下部、「地」部分と「中廻し」の境界においても同様の傷みを認める。また「地」部分の右端には、細かな染みのようなものが見られ、左端の軸付近には、表装の紙がよれ、細かな皺となっている。

#### 火天

表装の剥がれは本紙上部左側および上部右側に二箇所ほど見られるほか、画面下部左側に縦方向へ帯状に伸びる剥落が認められる。巻皺が本紙の上部から下部にかけて多く見られ、皺に沿って亀裂の生じている箇所がある。胡粉が画面の各所に用いられているが、全体的に剥落が目立っている。帝釈天と同様、表装の「天」や「地」と「中廻し」との境界には表装の紙の剥がれが認められ、上下にめくれている。表具の「地」の部分の右下には円形に亀裂のようなものが見られた。

#### 焰魔天

本図は傷みが顕著で、本紙右側の上から下にかけてかなり広範囲の剥落が見られる。画面左側から中央に向けても上から下へ向けて剥がれが認められる。また画面中央より少し下の部分に、左から右に向けて伸びる巻皺があり、それに沿う形で亀裂と顔料の剥落が見られた。尊像部分においても、表層の紙の剥がれは随所に見られ、特に両肩の部分に著しい。

画面左側には、表具の「天」部分から下方に向けて等間隔で並ぶ円形の水染みのような箇所が見られる。水染みは下方に移るに従ってその半径を狭めていることから、軸を巻いた状態で何らかの液体がかかり、中心に向けて染み込んだものであるうか。また画面下部の「地」部分には、薄茶色の汚れが帯状に水平方向へ

と伸びている。

#### 羅刹天

本図においては、本紙の上部に広範囲の剥落が見られるほか、尊像の右側と左側にも剥落が点在する。巻皺も多く見られ、特に画面中央において三本の皺が水平方向へと走り、その皺に沿って亀裂と顔料の剥落が認められる。また「天」部分において右側の風帯の周辺に虫喰いが見られた。

#### 水天

剥落は本紙の上方左側に大きなものが一点、下方に一点見られる。画面右側にも比較的大きな剥落が幾つか認められる。巻皺に沿った亀裂と顔料の剥落は本図にもみられ、尊像の胸の辺りにおいて顕著である。画面上方右側には、茶褐色の汚れのようなものが見られた。軸から染み出したような汚れは本図においても見られる。

#### 風天

本図は他の作例と比してもかなりの劣化が見られ、尊像を囲むようにして表装が剥落している。巻皺も本紙の上方から下方にかけて全体的に著しく、特に尊像の腰の辺りを水平に走る巻皺は、大きな亀裂を伴っている。本図の上端と中廻しとの境界線上に亀裂が見られ、画面左端から本紙にかけて紙が二つに裂けた状態となっている。また、軸から染み出たような汚れは本図にも認められ、表具の「地」部分にも汚れが付着する。

#### 毘沙門天

本図においては画面上方左側から右側にかけて、尊像を取り囲むように表層の紙が剥がれている。尊像の胸の部分や右足に近い裳裾部分に、胡粉で格子状の模様当初描かれていたものと想像できるが、現状ではかなり剥落が進んでいる。表具の「天」部分、左側の風帯の中央部に黒っぽい汚れが見られ、同様のものが「天」の左端部分にも二箇所見られる。「天」や「地」と「中廻し」の境界線に見られる表層の紙の剥がれとめくれは、本図においても顕著である。また、軸と「地」

部分に見られる汚れも同様に確認できる。

#### 伊舎那天

本図は尊像の周囲のみならず、尊像の相貌、足の部分にも剥落が見られる。そのため相貌の下半分は図様が明らかではない。また画面中付近とやや下に二つ、大きな山折の巻皺を認め、その折り目にそって顔料の剥落が起きている。画面全体を見ても、また画面左端には、「中廻し」の上端部分から本紙中央やや下にかけて、等間隔で虫喰いが並ぶ。虫喰いは「地」部分の左端にも二箇所ほど認められた。

#### 梵天

本紙左側の上方から下方にかけて、広い範囲にわたる剥落が幾つか見られ、左側にも同様に剥落が点在する。尊像においても、左肩や右肩を中心に顔料の剥がれが認められる。本紙右端、画面中央よりやや下には、円形の水染みのようなものが見られる。また、本紙下部左端から尊像の足の部分にかけ、比較的大きな範囲で水染みのような状態が認められた。

#### 地天

本紙左端、上部から下部にかけて剥落が数箇所確認できる。また画面中央やや左にも画面上部に縦方向に伸びる帯状の剥落が二箇所あり、画面右側にも幾つか剥落が見られる。巻皺も多く見られるが、本紙上半分に二箇所顕著なものがある。そのうち上側に位置するものは巻皺に沿って亀裂があり、またその亀裂を起点として上下に剥落が起きている。「地」部分の上側中央には、茶色の小さな染みが三点ほど見える。

#### 日天

画面上方に左側から右側にかけて広範囲の剥落がある。画面左側中央、中央やや谷下や、画面右側中央にも同様の剥落が見られる。本図においても、巻皺が多く見られ、特に画面中央やや下に位置するものは状態が悪く、亀裂と顔料の剥がれを伴っている。表具の右端には、「天」部分から本紙上部のあたりまで、一定間隔

で虫喰いが認められる。

#### 月天

剥落は画面上部左側に大きなものが二箇所認められる。また画面右側にも似たような形状の剥落が見える。本図においては、画面右側、「天」部分の下部あたりから、「地」部分にかけて、等間隔に並ぶ水染みのようなものが見られる。水染みの周囲は茶褐色に変色を見せており、同様の形態が連続して並ぶ。

### 二 樂法寺本の図様について

十二天は護世の天部で、四方四維の八方と天地日月を守護し、後七日御修法など、密教寺院において重要な儀式に用いられる。十二天像は座形と立形に大別され、本図において尊像は立形に描かれている。樂法寺本は、全体として画面の剥落など痛みは激しいものの、遺存する部分の顔料は概ね鮮やかな色彩を保っている。筆致は自由かつ勢いに富むが、本来切金などが用いられる格子状の文様などは全て胡粉など他の顔料で代用されており、細部の文様などには粗さも見られる。樂法寺本における各尊像の図様を以下に示したい。

帝釈天 (Indra) (種圖一) は二臂、武官形で表され、左手に八咫鏡、右手に独鈷杵を持ち、毘羅座の上に佇立する。肉身は胡粉を用いた白で表され、火焰光、宝冠、胸飾り、独鈷杵、脊など各所に金泥が用いられる。衣服に切金風の装飾が二箇所ほど見られるが、実際は顔料による筆彩色である。尊像が立つ毘羅座の淵は胡粉で塗られ内側へ向かって暈しがかげられる。

火天 (Agni) (種圖二) は老仙形に描かれ、四臂を持ち、左上腕に竹杖を、下腕に水瓶を持つ。また右上腕には宝珠を、下腕には念珠を持ち、毘羅座に立つ。本図においては、火焰光の朱が鮮やかに残り、暈しを伴って彩色されている。衣服の一部には胡粉が用いられ、また水瓶、宝冠、宝珠、胸飾りなどに金泥が施される。着衣の一部には筆彩色による切金風の文様が見られる。

焰魔天(Yamadava)〔圖9〕は菩薩形に表され、左手に檀拏鐘を持し、右手は仰掌に構える。着衣には緑、群青などが用いられ、胡粉により文様が描かれている。胡粉で文様中に点が描かれた箇所は、顔料が盛り上がっている。金泥が火焰付輪光、宝冠、檀拏鐘、胸飾り、臂釧、腕釧などに用いられる。

羅刹天(Raksasa)〔圖4〕は武装神形で、二臂、左手は劍印を結び、右には宝劍を構える。具色を用いた群青、緑や、胡粉などが着衣に見られ、火焰付輪光、帯喰い、宝劍の柄などに金泥が用いられている。

水天(Varuna)〔圖5〕は菩薩形で、肉身は紺色に描かれる。宝冠には蛇が描かれ、二臂、左手に竜索、右手に宝劍を持っている。火焰付輪光、宝冠、宝劍、胸飾り、臂釧、腕釧などに金泥が用いられ、蛇や衣服の一部に胡粉が用いられている。

風天(Vayu)〔圖6〕は老仙形で表され、衣服や頭髮が風になびく様子が描写されている。二臂で、先端に金篋のようなもの付いた幡幢を両手で支えている。頭髮や衣服の文様、髹髹座などに胡粉が用いられ、火焰付輪光、宝冠、胸飾り、宝劍の柄、腕釧、宝棒、着衣など数箇所が金泥で塗られる。髹髹座は具色を用いた群青で彩色される。

毘沙門天(Vaishavana)〔圖7〕は武装神形で表され、頭には兜、左手に宝塔、右手に宝棒を持つ。本図においては多門天と題箋に表記が見られるが、通常は多聞天とし、また十二天像においては多聞天ではなく毘沙門天を通常使うので、本稿でもそれにならった。本図において特徴を成すのは兜で、通常は見られない日本風の鍔形が兜についている。各所に具色を用いた群青が塗られ、袖や髹髹座などに暈しを伴った胡粉の彩色が認められる。切金を模したような筆彩色の文様が着衣の胸の辺りや裾に施されている。金泥が火焰付輪光、宝棒、兜、帯喰い、腕釧、着衣などに用いられている。

伊舎那天(Isvara)〔圖8〕は力士形、緑色身で描かれる。二臂で左手に盛血杯、右手に三鈷戟をとる。火焰付輪光、宝冠、胸飾り、臂釧、腕釧、盛血杯、三鈷戟などに金泥が用いられ、着衣には切金を模したような表現が胡粉により施されている。

。本図においては傷みのため相貌の一部が明らかでない。

梵天(Brahma)〔圖9〕は菩薩形で、白肉身、四面四臂にあらわされる。左上腕に水瓶、下腕に三鈷戟を持ち、右上腕には蓮華茎、下腕は伏掌にかまえる。火焰付輪光、水瓶、宝冠、胸飾り、臂釧、腕釧、三鈷戟、着衣の文様などに金泥が用いられている。

地天(Prithvi)〔圖10〕は菩薩形、二臂、白肉身で描かれており、左手に盛花を持ち、右手を仰垂掌に構える。火焰付輪光、宝冠、盛花、胸飾り、腕釧、臂釧などに金泥が施される。衣服には切金を模したような文様が見られるほか、裳の部分には海波のような独特の文様が胡粉により描き込まれている。

日天(Surya)〔圖11〕は菩薩形、二臂で描かれる。右手には蓮華茎に載せられ、鳥が中に描きこまれた日輪を持ち、左手を蓮華茎の下部にそえる。本図においては、尊像に第三眼が描かれている。通常第三眼は、帝釈天、梵天、水天などに描かれるが、日天においては珍しく、樂法寺本の特徴となっている。火炎付輪光、胸飾り、臂釧、腕釧などに金泥が施される。

月天(Chandra)〔圖12〕は菩薩形、白肉身に二臂で表され、蓮華に載せられ、兎が中に描かれた月輪を両手で支えている。火焰付輪光、宝冠、胸飾り、臂釧、腕釧などに金泥が用いられている。

#### 四 諸本における樂法寺本の位置付け

樂法寺本は、現在明らかとなっている十二天の図様の系統から見ると、特殊な部類に分けられることが推測される。先行研究においては、立像で描かれた十二天の主な図様系統として、神護寺本系、東寺本系〔圖28〕の二系統が挙げられており、別系として大宝院本などが知られている〔1〕。神護寺本系として分類されるのが、聖衆来迎寺、高山寺などの諸本であり、東寺本系としては広隆寺本、長谷寺本、長福寺本、西明寺本などが知られている。

樂法寺本の図様は、全体としてみると、東寺本系に近い雰囲気を持つ。しかし細部を見ると東寺本系の諸本と異なる特徴も見られる。以下に樂法寺本の特色のある図様について述べたい。

樂法寺本の帝釈天は、画面右手を向いており、正面向きの神護寺系とは異なる。東寺本系の特徴を示している。焰騰天も、基本的には東寺本系の図様を踏襲する。羅刹天においては、他に見られる赤色身の描写を踏襲しておらず、東寺本系諸本とは若干雰囲気を異にしている。

火天は、一見したところ、どちらかといえば東寺本に近い画面の印象を受ける。しかし、左の上腕に竹杖、下腕に水瓶、右上腕に宝珠、右下腕に念珠という持物の構成は、東寺本とはまったく異なる。比較的樂法寺本と類似していたのは東寺本系として分類される西明寺本であった。ただし、右手下腕の向きは樂法寺本と一致しない。

水天像は、樂法寺本では正面から捉えられているが、よく知られる東寺系、神護寺系諸本ではいずれも画面右手を向いて描写されており、樂法寺本の図様がどちらの系統にも属さない珍しいものであることがわかる。

風天の描写において、尊像が斜め左上方方向に宝棒を担ぎ、右を向いて佇立するのは東寺本、神護寺本、樂法寺本ともに見られる特徴である。しかし、諸本では左手は宝棒から若干距離をおき、手の甲を上に向けた姿勢をとっているのに対し、樂法寺本では左手は宝棒を下のほうで握っている。この図様も両系統に属さない本図の特色と見られる。

先にも触れた、樂法寺本の毘沙門天の兜に見られた日本風の鯨形の図様については、今回確認した限りでは類似の表現を他に見ることが出来なかった。この表現については、樂法寺本の制作者による自由かつ独自の筆意によるものか、もしくは前例があるのか、現在のところ明らかではない。伊舎那天、梵天、地天については、基本的に東寺本系図様の踏襲が見られた。

日天と月天は、樂法寺本ならではの特色が見られる。東寺本系と称される諸本

において、尊像は左手に赤玉の載った蓮華茎を持ち、右手には白蓮華茎をとるが、樂法寺本では赤玉の載った蓮華茎を両手で支えている。また、月天は東寺本系において尊像が真横を向いた状態で描かれるが、樂法寺本では尊像は斜め右を向いている。これらの特徴もまた、東寺本系あるいは神護寺系とも異なるものである。

このように、樂法寺本は全体としては東寺本系と見なされる諸本の図様と近い雰囲気を持つが、細部においてはさまざまな相違点を持つことがわかる。このような樂法寺本の特色と類似する作例を他に求めたところ、長谷寺所蔵の十二天像と、金沢文庫所蔵の十二天像が確認できたので以下に示したい。長谷寺所蔵の作例の中には樂法寺本の特徴であった、正面向きの水天像が一点見られる(補図30)。室町期を作画期とする本作には、樂法寺本への影響が想起されるが、毘毘座ではなく鳥獸座を用いているなどの図様の相違もある。

また、同じく長谷寺所蔵作例のうち、江戸期を制作年代とする一点(補図31)の(二)(三)は全体的には東寺本系の特徴を有し、細部の図様では樂法寺本との共通点が見られた。まず、火天における持物と腕などの向きは、先に挙げた東寺本系の諸本の中で完全に一致する作例は見られなかったが、長谷寺の作例では、持物の種類と腕の姿勢がいずれも樂法寺本と一致している。また、火焰光が左斜め上を向くという図様は東寺系諸本には見られず、長谷寺本および樂法寺本に見られる特徴である。

日天、月天における尊像の姿勢や持物も、樂法寺本の特徴的な図様のひとつであったが、この点でも長谷寺本との一致が見られた。すなわち、日天においては蓮華茎を両手で支えるという表現、月天においては、尊像が斜め右を向き両手で白玉を支えるという表現である。

これらのことから、樂法寺本と長谷寺所蔵の十二天像の図様の類似は、東寺本系を基調としながらも、細部においてかなり図様の異なる別系統の十二天像の存在を予測させる。また、樂法寺は眞言宗豊山派に属し、江戸期を通じて長谷寺と

任職の移動などを通じて交流のあったことが知られることから(も、長谷寺との親密な関係の中で、図樣的な影響が両寺間にあったと予測するのは自然なことと思われる。

また、金沢文庫所蔵の三点の十二天像(圖②、③、④)は、画面の雰囲気、細部の描写ともに、樂法寺本とかなりの類似をみせる作例である。甲本と呼ばれる十二天像は、作画期が室町期とされ、全体の雰囲気は良く似通うだけでなく、火天における持物、尊像の姿勢が一致し、火焰光の形状も類似する。尊像の髪が大きく逆立つという表現においても両者は共通する。

また、東寺本系諸本に見られなかった正面向きの水天、蓮華茎を両手で支える日天や、斜め右を向き、両手で兔の描きこまれた白玉を支える月天など、樂法寺本が東寺本系諸本と異なる特徴を多くの点で共有している。また、乙本、丙本とされる作例にも、風天などの画像において樂法寺本と共通点が見られる。

金沢文庫本は来歴が明らかでないことから、現段階では長谷寺本と樂法寺本のように、宗派などの括りでその位置付けについて考えることはできない。しかし、樂法寺本、長谷寺本、金沢文庫本の図樣的類似と、東寺系諸本との相違は、これらの作例の直接的な影響関係、もしくはこれらの諸本に影響を与えた画像の存在を予想させるとともに、十二天像におけるひとつの系統の存在を示唆するものであろう。

## おわりに

本稿では、樂法寺本の調査報告をおこなうとともに、その図樣的な位置付けについても若干の考察を試みた。本稿では樂法寺本をおおまかには東寺本系として位置付けたが、細部においては本図が東寺本系の一般的特徴とは異なる特徴を見せたことから、長谷寺本、金沢文庫本など樂法寺本と類似する作例を取り上げ、東寺本系に含まれる別系統の存在の可能性について指摘した。本図の制作年代につ

いては、裏書や画風から江戸期でも時代的にそれほど上るものではないものと考えられ、室町期の金沢文庫本や、江戸期の長谷寺本との関連も含め、この図様系統自体が東寺本系などと比して比較的新しいものではないかと予想される。今後、より多くの作例を確認するとともに、十二天像における本図や同系統の図様の位置付けについて研究を進めたい。

## 註

- (1) 渡邊一「東寺十二天屏風考」『美術研究 第六〇号』、帝國美術院付属美術研究所、一九三〇年、五一―八頁、柳沢孝「青蓮院所旧蔵の立像十二天図について」『國華 第八三三号』、國華社、一九六〇年、三九四頁参照。
- (2) 『豊山長谷寺拾遺 第一輯 絵画』(元興寺文化財研究所編、繪本山は背寺文化財等保存調査委員会発行、一九九四)二五一―二五二頁。
- (3) 前掲(2)、二七九―二九〇頁。
- (4) 『大和村史余稿』(飯島光弘著、大和村役場発行、一九九六)一五五―一六〇頁参照。
- (5) 展覧会目録『密教美術』(神奈川県立金沢文庫編、一九九二)五二―五三頁、五四―五五頁。



挿図2  
火天



挿図1  
帝釈天





插图4 羅刹天



插图3 焰魔天



挿図6 風天



挿図5 水天



插图8 伊舍那天



插图7 昆沙門天



插图10  
地天



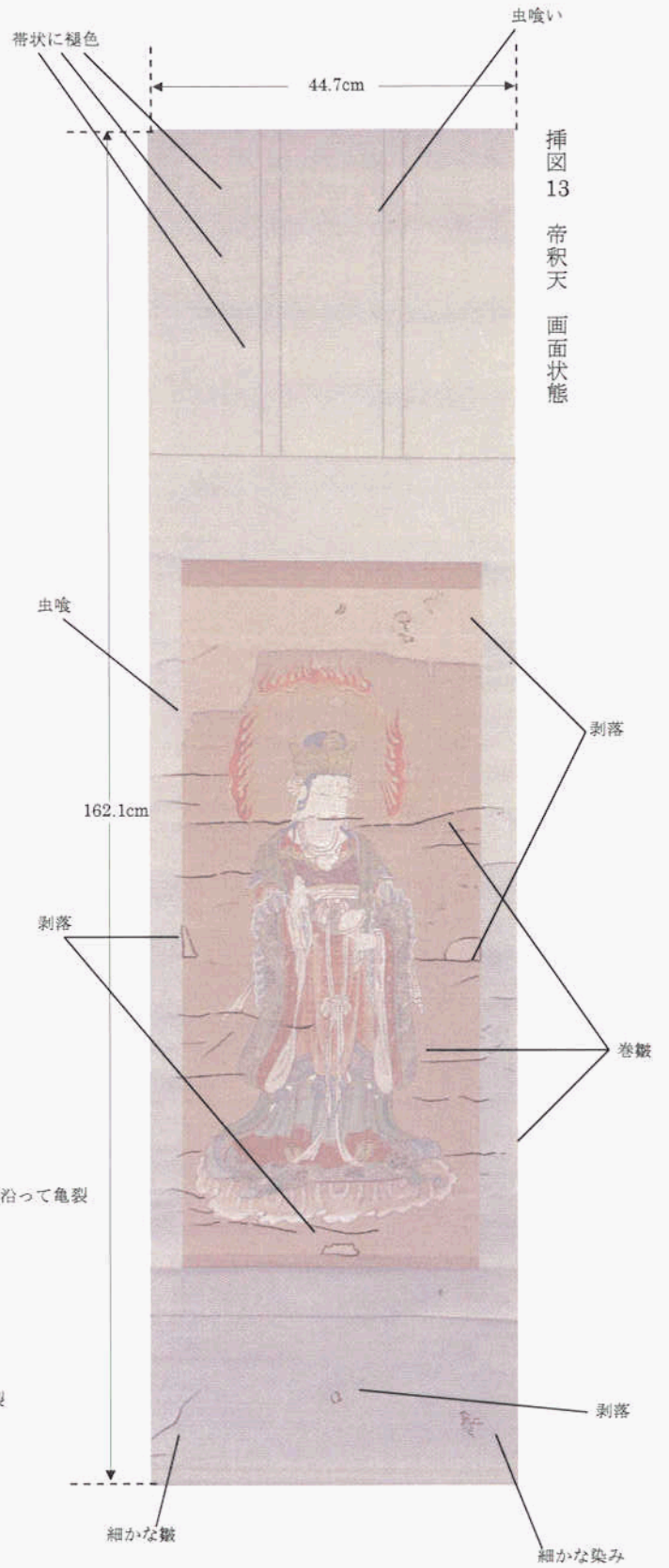
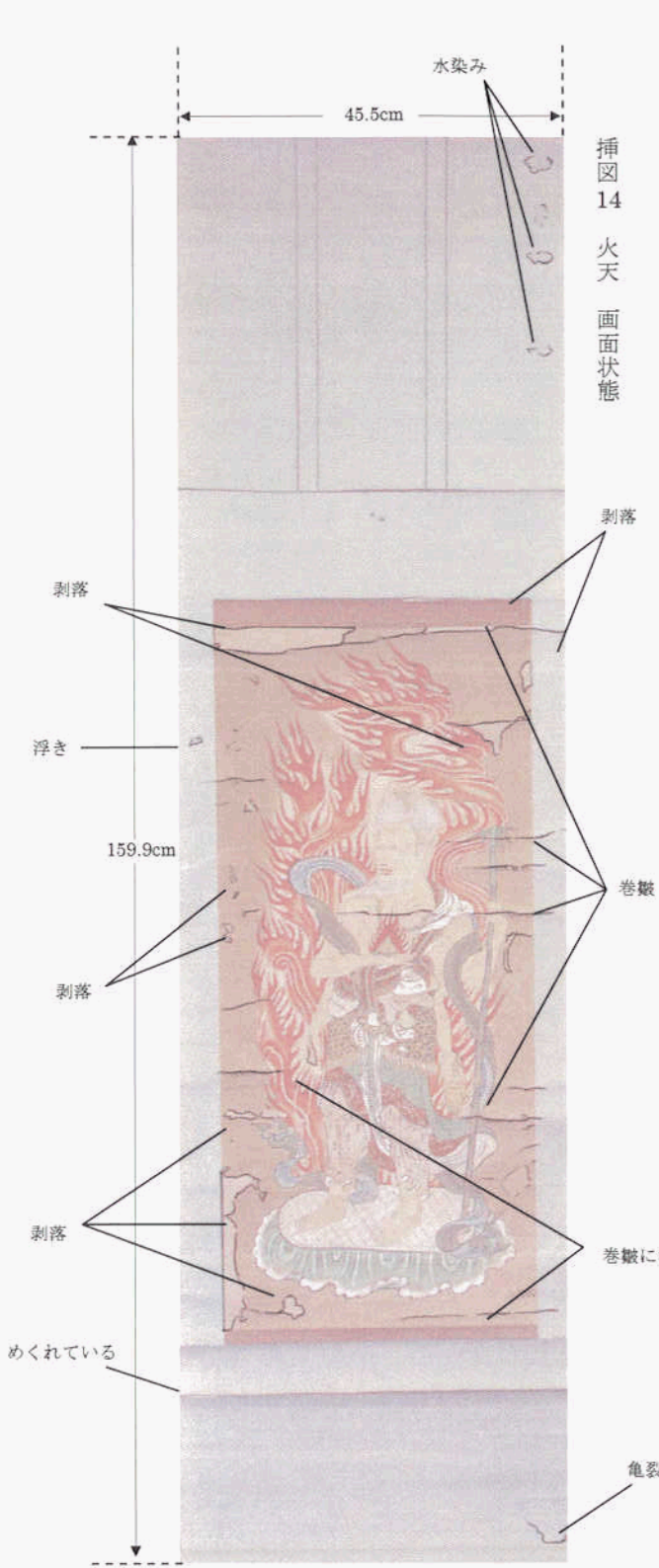
插图9  
梵天

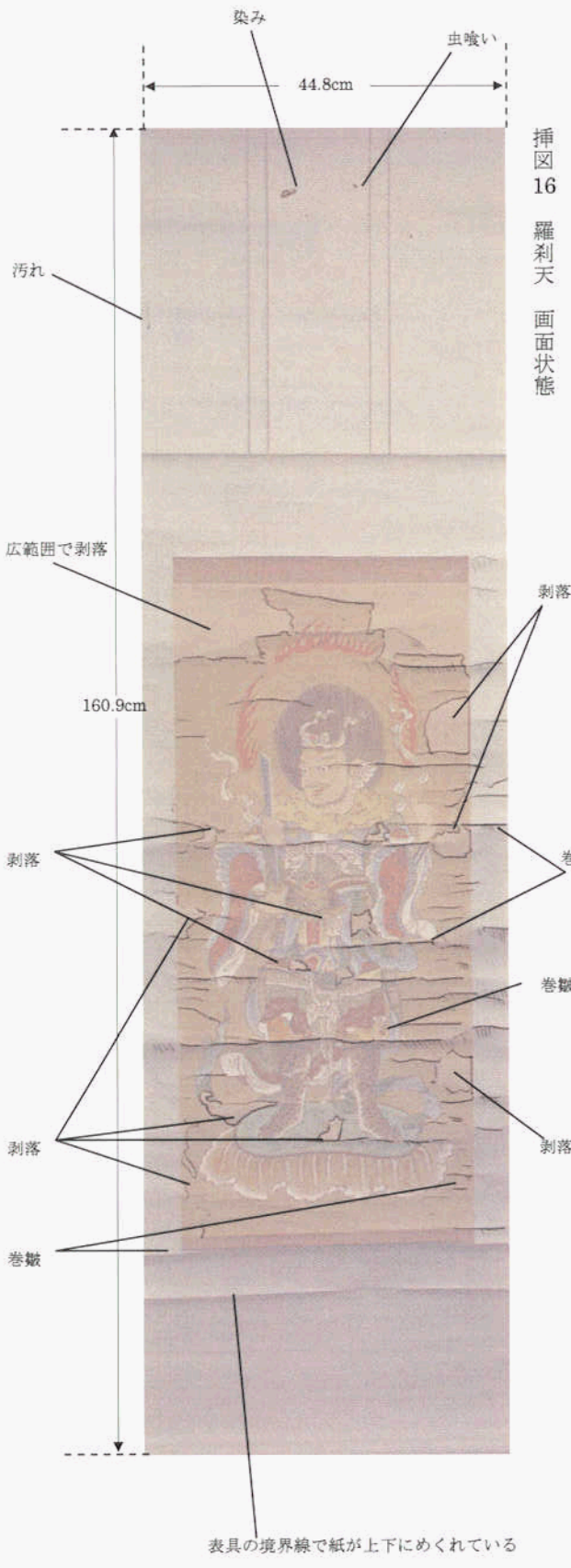


插图 12  
月天

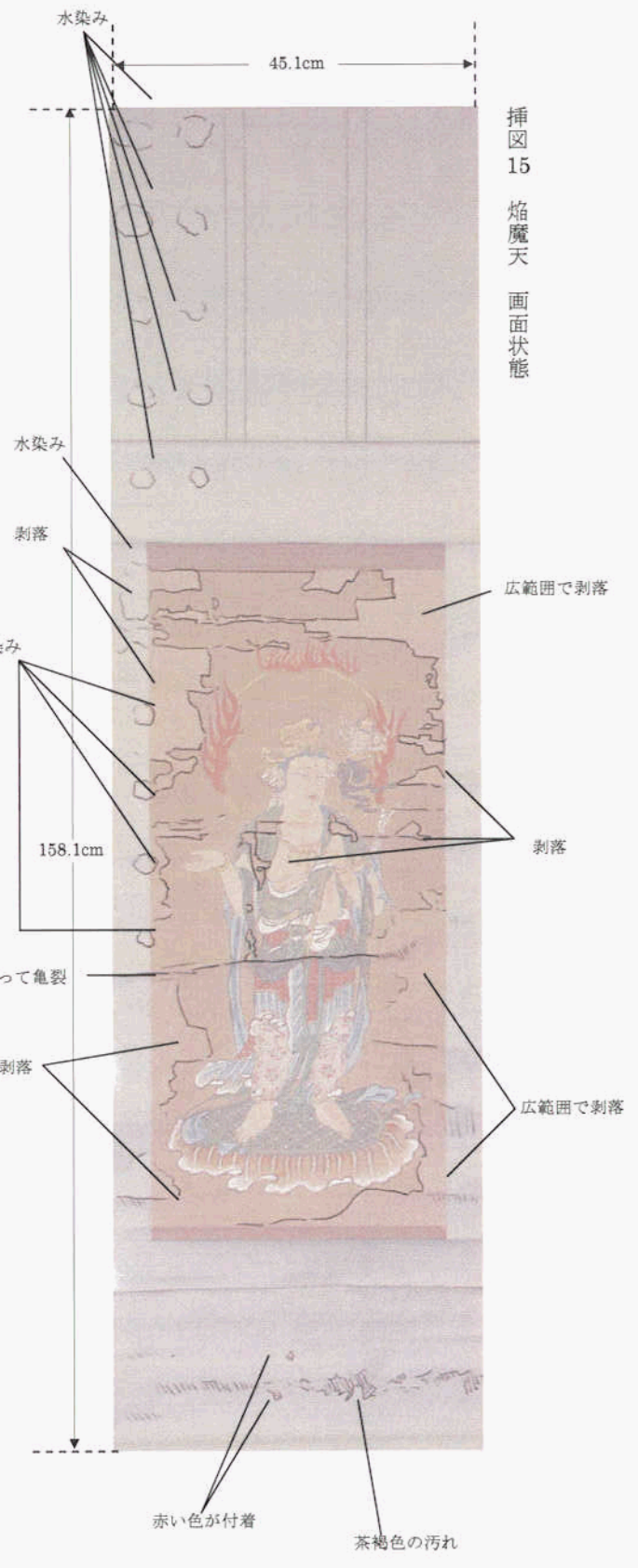


插图 11  
日天





挿図 16  
羅刹天  
画面状態



挿図 15  
焰魔天  
画面状態





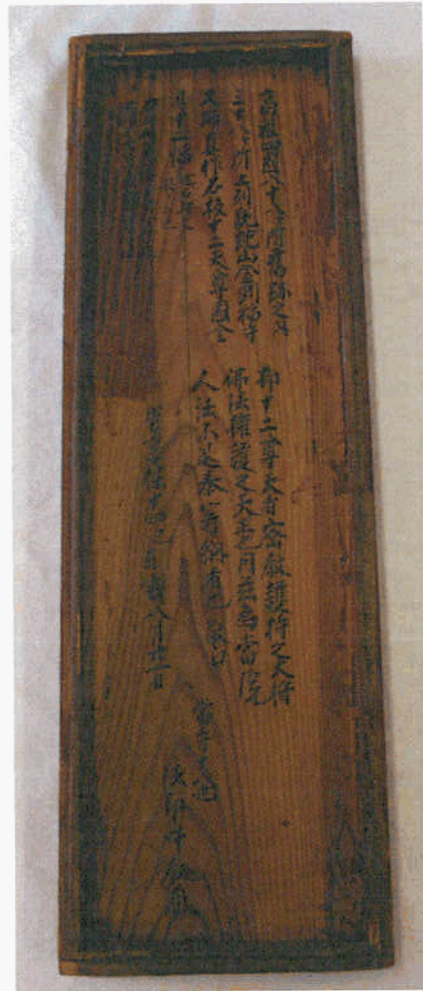








挿図 26  
外箱 蓋



挿図 25  
外箱 蓋裏書



挿図 27  
外箱 補修の跡

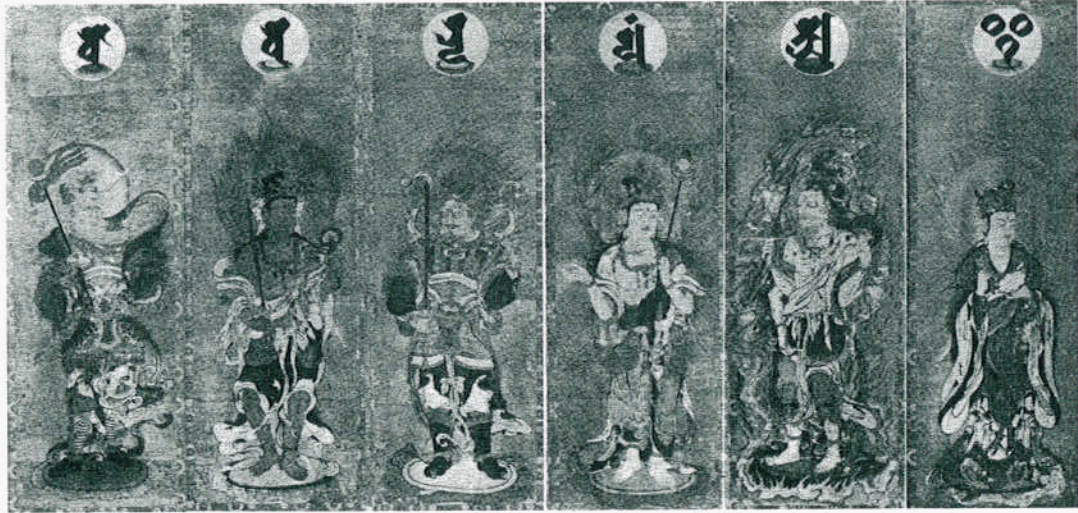


插图 28—① 十二天像 東寺所藏

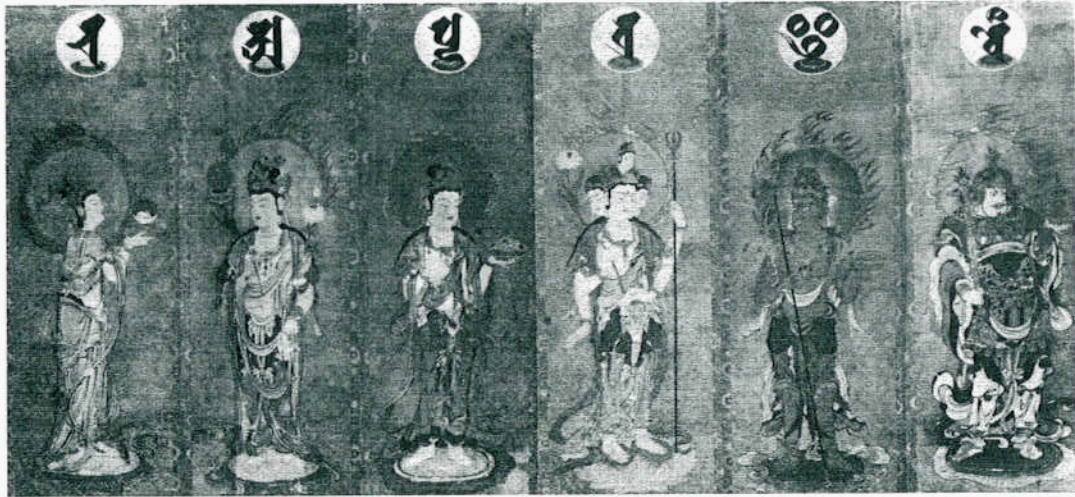


插图 28—② 十二天像 東寺所藏

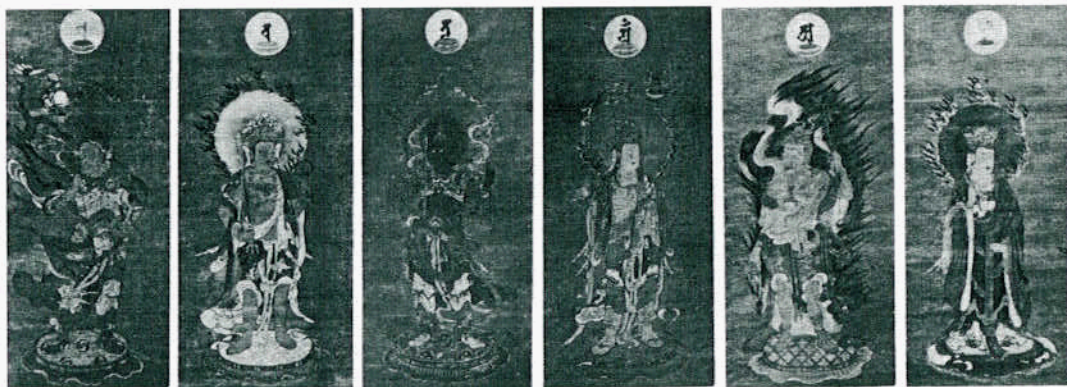


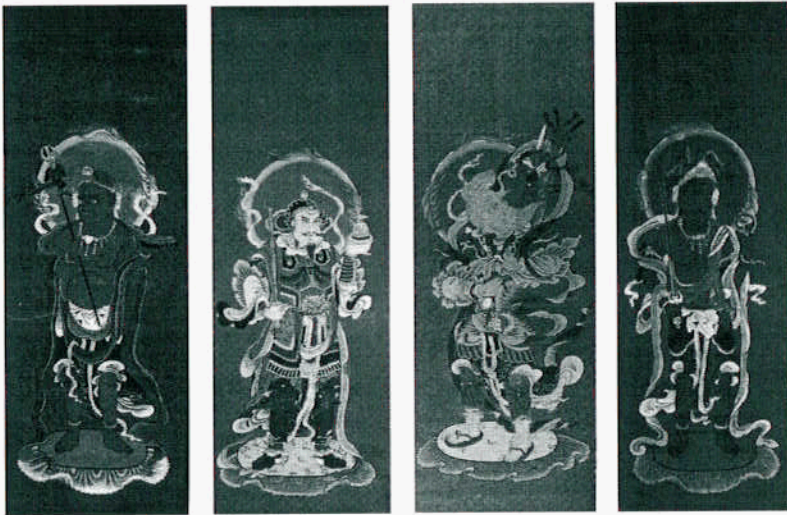
插图 29 十二天像 西明寺本



挿図31—① 十二天像(江戸期) 長谷寺所蔵



挿図30 水天像(鎌倉期) 長谷寺所蔵



挿図31—② 十二天像 長谷寺所蔵



参考 楽法寺本 水天像



挿図31—③ 十二天像 長谷寺所蔵



插图 32—① 十二天像 金沢文庫所蔵



参考 楽法寺本



插图 32—② 十二天像 金沢文庫所蔵



参考 楽法寺本